

名取洋之助はなぜ『LIFE』で持ち上げられたのか : 生誕100年展準備で気付いたこと

白山 眞理 SHIRAYAMA Mari(日本カメラ博物館)

「非常に好感の持てる青年[An extremely likable young man]」(1937年5月10日号)。

「ハンサムで明るく気楽な若い貴族のようで、誰もが好きになる。世界最高のカメラマンでもある[a handsome, cheerful, easy-mannered young aristocrat whom nobody could help liking. He is also one of the world's best photographers.]」(1937年11月29日号)。

「ハンサムで、にこやかで、ざっくばらんな28才の坊や[a handsome, smiling, relaxed little man of 28]」(1938年11月14日号)。

これらは、アメリカのグラフ週刊誌『LIFE』に記された報道写真家・名取洋之助(1910-62)評である。1931年のドイツで報道写真家となり、1933年にヒトラー政権によるジャーナリスト規制のため日本に拠点を移した名取は、36年6月にオリンピックベルリン大会取材などのために再渡独した。そこから37年4月にアメリカへ渡り、すぐにタイム社の『LIFE』『FORTUNE』などと契約を交わして9月まで取材旅行をした。名取自身は、エージェントを通じての契約だったと記しているが、その経歴から、彼同様にドイツを追われてグラフ誌に携わっていたユダヤ系の旧友たちがアメリカで引っ張ってくれたのだろうと考えられていた。

前述の名取評は好意的で、旧友が示した親しみの現れとも受け止められる。しかし、繰り返し読むうちに、報道写真家として撮影・配信した仕事の記事に、写真家個人に対する最上級の人物評が重ねて掲載されるのは異例ではないかと気づいた。

このような文章を誰が書いたのかを探ってみると、アーチボルト・マクリーシュ(Archibald MACLEISH, 1892-1982)が浮かび上がってきた。33年に詩部門でピューリッツァー賞を受賞している彼は、タイム社社主で『LIFE』編集長のヘンリー・ルースとエール大学以来の友人で、30年に創刊した経済月刊誌『FORTUNE』の主筆であった。36年3月から5月まで日本特集号取材のため日本に滞在し、写真家・名取と親しくつき合い、その写真を多用して同年9月に特集号を刊行している。

名取の妻であったエルナは、名取没後の追悼会で、マクリーシュは「洋さんを見た瞬間から愛していた」と述べている。そして、アメリカ滞在中に名取夫妻がマサチューセッツ州にあるマクリーシュ家の「アップルヒル・ファーム」の客人となっていたこと、晩年の名取からメッセージを託されたエルナが訪ねると20年以上前の思い出を「飽きることなく話し続けていた」と語った。

名取家に残されていた文書の中から、マクリーシュがルースに宛てた37年1月7日付の手紙が見つかった。そこには、名取夫妻が同年5月に渡米予定であること、車での大陸横断を計画していること、天才的な写真家名取に「東洋人がはじめて見たアメリカ」を撮影させようという企画の提案などが記されていた。なぜこの手紙を名取が持っていたのかは不明だが、名取がアメリカに着いた途端にタイム社のゲスト写真家となって多数の記事が展開された影には、マクリーシュの力があつたことが明確になった。

タイム社では、『LIFE』と『TIME』がスペイン内戦報道において徹底的にフランコ将軍側に立っていたが、反するように『FORTUNE』は人民戦線を正統な政府と位置づけていた。同様に、中国最前線のルースに対しマクリーシュが名取(=日本)を最前線にバランスをとろうとしたのだろうか。

マクリーシュは、38年に『FORTUNE』を離れて、連邦議会図書館長に就任し、大統領のスピーチライターや戦時情報局次長として活躍する。軌を一にするように、39年以降、名取の写真を使った『LIFE』の記事に彼個人に言及する語は見つからない。また、名取の写真は同誌に30回以上取り上げられているが、半数以上が39年までに掲載されている。

名取の代表作である「アメリカ」シリーズを撮影させることになったマクリーシュの真意を今後も調査することで、名取洋之助の報道写真と社会との関わりを探っていきたい。